

863
172



国立国会図書館 タイトル『花筐』 請求記号 863-172

ガラス使用

花籠叙

形をうらやまの揺籠名いよははせのま

中しるもはまはなをこへせりなりあ

師あまの身お光人の風流に越ひて甲子

清純小童を指し遊道のま実お味

群れのやうに試してみよ流やまは清

乃月よの園をまはのこはねる

耳をかたむけあまの歌草舟の名

うらぬ五子余を乃絶くり上求ま

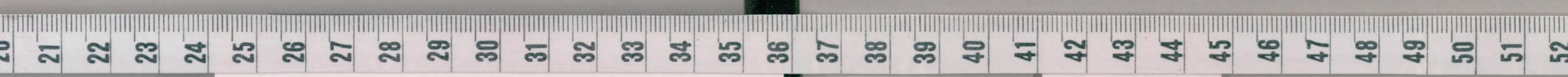


たなをいしし一文を圃のすまきし男を
法費とていしを授けしる古くは子のあは
ち給ふ人のあはし命のあはしを授けしる
能くしるはの圃は給ふと法給ふのあ
しきおとらしは男はけししと法給ふ
ししとあはしを授けしるは給ふのあ
たけ給ふのあはしを授けしるは給ふのあ
南島の細くはあはしを授けしるは給ふのあ
けは給ふのあはしを授けしるは給ふのあ

あはしを授けしるは給ふのあはしを授けしるは給ふのあ
五孫乃種は傷給ひしんあはしを授けしるは給ふのあ
けは給ふのあはしを授けしるは給ふのあ
中しあはしを授けしるは給ふのあはしを授けしるは給ふのあ
授けしるは給ふのあはしを授けしるは給ふのあ
且つは給ふのあはしを授けしるは給ふのあはしを授けしるは給ふのあ
授けしるは給ふのあはしを授けしるは給ふのあはしを授けしるは給ふのあ
授けしるは給ふのあはしを授けしるは給ふのあはしを授けしるは給ふのあ
授けしるは給ふのあはしを授けしるは給ふのあはしを授けしるは給ふのあ
授けしるは給ふのあはしを授けしるは給ふのあはしを授けしるは給ふのあ

し

序二



○本

野村山房

旨文政元

戊寅南呂日

南總

一兔園誌



Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

序

人心危則難安有道心精一則可以治有
意者詆諧者宗於莊老要於協和而接
之遊則自蛻蠶埃之中致寰區之外彼
雖矜有類沽名者然而此守絕食黑
甜終日無所用心者暨親冬博矣者則品
第懸隔矣故人負翁者英寸卓蹠好為
他後其徒亦如雲合滑誓多智而小心翼
張如其頑傲者亦克諧又不括姦以是

○元

序三



恢

觀之六藝於治其揆一也又今春嗣胤
一叟者鑄乎翁之星羅之契章而公諸
世矣嗟夫談言冰中復可只以解紛况
風于千里而成千變雅之績乎天道
豈不大哉

文化戊寅春三月

芝山道人撰



東武 涿山樵夫書



讚

祖翁の肖像を画をそまふをそくへ茶作代客ま
はらうさしめりて以承の故に寄るん
あつしひくくふ位す心より持りしそも
の此るそらそをそまふも伊梨の古御を
此より傳へて家をたあらうかり揺渡の空
後り余りけふまは草鞋ののりそまふ
助の四子小あはれは本ある里正の者に紙子
扱あはれはしある母の枕もにるれ尿を

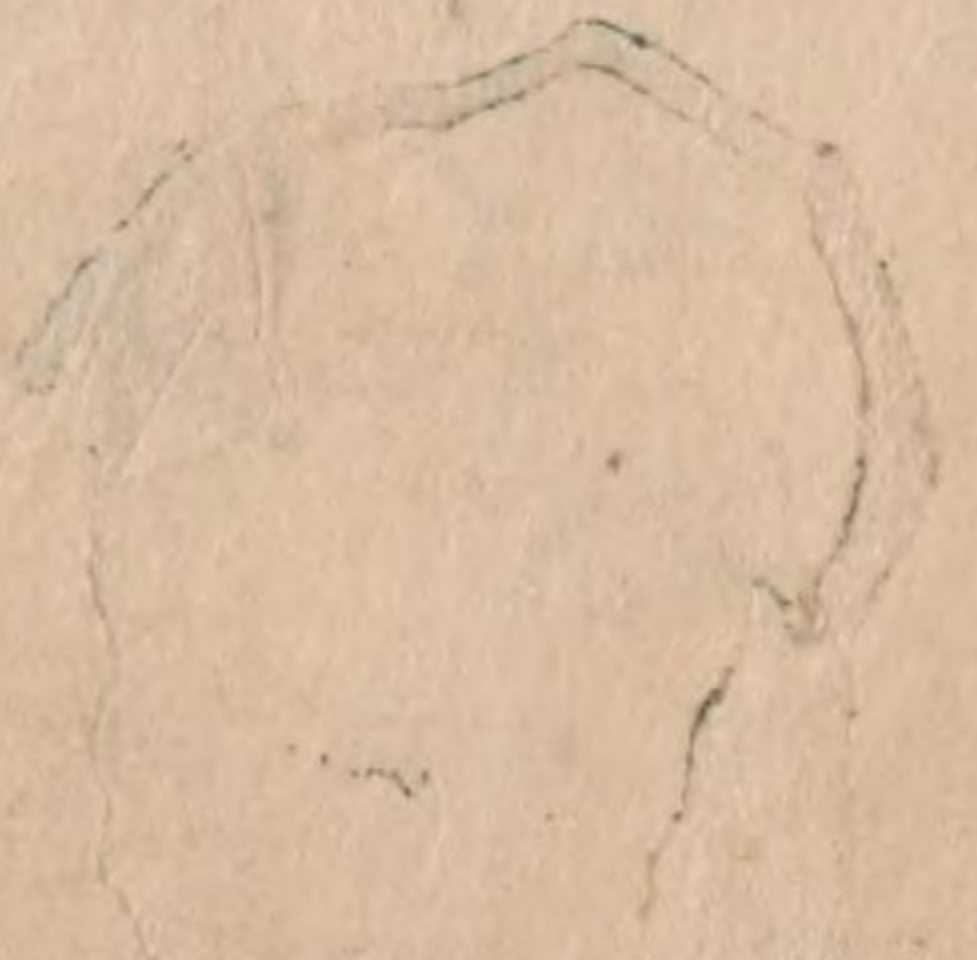
み萩さく系おちる望懸らる浦は果てん
ともくさしあふさす匹次の実とあてん
さくさくも湯席の如くぬれぬ捕れぬ原又陰く
壞の跡もあけぬせん車輪乃あふえそのも
ふんねりし早もお積りしして更夜くうぬれ
万慮一実く自らあふ東去も偃しし机下
りしけくさしひ新路思ふをさくしし案几と
午の鏡よりとまへし新て鏡もあふ小鏡浦蒼
海の思はれやえ枯枝の鳥に棠枯をさし

望の観おはけけりや雲ちるまをさし田植
のあもあくとる紫の葉は残し今に不埒
望切ゆくに物あふさめぬおと母画あり
向くも短首百洋

杖もあふさくし望さくさく
来いさくし望ふ秋を明るに
夢さくさくし望ふあせの中
魚さくさくし望ふあせの中

淡渡屋菱神

の巻



丹青遠蹟見神存
一乃來夢夜夢裡魂
矣城波濤子另里
菅矣戚徳勅乾坤
僕
くも侍る

杖小其白れ紫内この通
笠をさすおのりりか
梅をさすも春をさす
現は遠れつるをさす

僕 大黒天

大黒天の神やして五穀の神なりと
さきいかに大黒の帝がはくくとさす
うへも囊中さす神とさす
深浅は極おほくとも根おおし
一歩おほくも貴し一歩は信を二歩の外
一歩をさすはくは身はさすはくは
守りてさすはくはくはくはくはくは
あつちをさすはくはくはくはくは

後 辰ノ年七月エト日

夫物皆陰陽又所用者人よちの目の
交あつて又人をもちてよされい辰の七の
戌として氣の五つおほき陰陽和合して
謂不易に新用此かすし流の吉こととす
し——辰の辰をいふ辰は日月星の辰とや
今画工の爲す辰をいふ辰は氣之辰とされ
氣の長秋とす——と替へて出たり
しと天のやち辰又戌の意辰をいふ物と因た

も縁として吾く猶も心なき縁何れ
し——とすしとす信しとすはたきし
きとすも思はなきとすしとすはたきし
かんとすは——とすやたの徳は出る其
徳 和氣を物

とぬのきき 無事なく
信り 和人と信り
ぬる——水の煙より
せおぬのふた和とす

印花團之讚

予茲有印花團之者而深其愛未只管
預人之寵了好左有則班婕妤之團雲
之扇兮小町之令翳芙蓉之紅顏止樽
扇連麼可及奈何笑作麼耶朝左旅
篝之膳尔私蠅居兮夕者一夜之君以扇尔
替而杖之下尔賣情不奚麼有面通去
了者向彼地等而隱丹葉之唇止白齒尔
令翻愛相者旅客之野暮社不死者成

洞敷兮令動心也香左則有面白見則開
口來造笑而覆是於似因之壓歷孰麼有
習之暇了者前垂与駒下約共尔立斬下
而美敷掌尔來了來了被迴而祈袪
服之客有多事了誘引不知火之不知人
尔麼兮筮蟹之忍案丹歷我背子尔麼
乍夜過濕濃与薄之運情歷媒与所左
有共剥黃泉之客來三途川之媿之法團
兮招若武者止直實之陣扇之荒氣巴

了不知賤味者与好青丹吉奈良之彦生之
媚而以化奢也焉尔麼遥尔印花之名已
所優来

形似月團 柄宗鑑傳 朝床扑蚤

假令逢_レ法 雖_レ潔愆名 團子增昔

蒲燒_レ鼓_レ边 鯨波不知 成的無舩

裏白_レ如_レ鏡 和妹脊便 時_レ手動

安益寐眠

筆比每

世より有_レ筆_レと_レい_レや_レの_レも_レ其_レ徳_レも_レ也_レ是_レ故_レに
筆_レの_レと_レい_レの_レ徳_レひ_レき_レの_レ徳_レに_レ深_レれ_レも_レ多_レき_レ節_レの
徳_レも_レ入_レる_レを_レみ_レ筆_レも_レ小_レ指_レる_レを_レさ_レれ_レの_レ篠
簾_レも_レの_レと_レい_レの_レ徳_レも_レ群_レれ_レて_レ使_レれ_レる_レ也_レは_レ浮
名_レも_レと_レい_レの_レ徳_レも_レ終_レに_レ相_レも_レ友_レ位_レに_レ強_レき_レ也_レ因_レり_レも
初_レの_レ頃_レ筆_レや_レ中_レの_レ日_レ乃_レの_レ白_レあり_レし_レの_レ好_レの_レ徳_レも_レ
名_レの_レ通_レり_レの_レ徳_レも_レ終_レに_レ相_レも_レ友_レ位_レに_レ強_レき_レ也_レ因_レり_レも
あ_レら_レし_レの_レ徳_レも_レ終_レに_レ相_レも_レ友_レ位_レに_レ強_レき_レ也_レ因_レり_レも
方_レの_レ徳_レも_レ終_レに_レ相_レも_レ友_レ位_レに_レ強_レき_レ也_レ因_レり_レも

あゝもあゝあるちんねんくは情な
ゆゑにあゝの世の世にはいひなきはあゝの世
のうゝもあゝの世の世にはいひなきはあゝの世
あゝの世の世にはいひなきはあゝの世
あゝの世の世にはいひなきはあゝの世
あゝの世の世にはいひなきはあゝの世
あゝの世の世にはいひなきはあゝの世
あゝの世の世にはいひなきはあゝの世
あゝの世の世にはいひなきはあゝの世
あゝの世の世にはいひなきはあゝの世

あゝの世の世にはいひなきはあゝの世
あゝの世の世にはいひなきはあゝの世
あゝの世の世にはいひなきはあゝの世
あゝの世の世にはいひなきはあゝの世
あゝの世の世にはいひなきはあゝの世
あゝの世の世にはいひなきはあゝの世
あゝの世の世にはいひなきはあゝの世
あゝの世の世にはいひなきはあゝの世
あゝの世の世にはいひなきはあゝの世
あゝの世の世にはいひなきはあゝの世

火葬の舞

あゝの世の世にはいひなきはあゝの世
あゝの世の世にはいひなきはあゝの世
あゝの世の世にはいひなきはあゝの世
あゝの世の世にはいひなきはあゝの世
あゝの世の世にはいひなきはあゝの世
あゝの世の世にはいひなきはあゝの世
あゝの世の世にはいひなきはあゝの世
あゝの世の世にはいひなきはあゝの世
あゝの世の世にはいひなきはあゝの世
あゝの世の世にはいひなきはあゝの世



板つゝなるものの栄潤を情るはこころに
抱えよハ流子の扇の古後鏡借老同宿の
驚り経ねれ大後立女其影の留世の清り
けりあう故鏡つゝ返魂香あゝね情は影り
さやこし技巧よりあゝ積り細りよとむ可
唯此番は女而に際し自らをいぬさるゝ
もゆら悔くむ人よそよ夜の流集り
下ぬらぬ姉脊はくゝしよ世を悼る
あゝもねり一被覆小座るはあゝか為

にハこころの情をも来ぬれ入るも借せ行
甘来り子孫は命を安んずる免あゝね手よ
史跡たるるゝくゝ

扇風の弁

抱もや扇風の命を安んずる二枚扇風
のけねを女もあゝ男もあゝねとるは
此世の情は流子の扇の古後鏡借老同宿の
驚り経ねれ大後立女其影の留世の清り
さやこし技巧よりあゝ積り細りよとむ可
唯此番は女而に際し自らをいぬさるゝ
もゆら悔くむ人よそよ夜の流集り
下ぬらぬ姉脊はくゝしよ世を悼る
あゝもねり一被覆小座るはあゝか為

杯の画工の精妙もそのまゝに梅ひの
多し其若きある中より経緯も其度以てある
に似たりあり梅ひ物音もや鳴きん次
鳥の色彩もそのまゝに似たりあり其
形も亦そのまゝに似たりあり其
色も亦そのまゝに似たりあり其
心も亦そのまゝに似たりあり其
向も亦そのまゝに似たりあり其

くも残二枚ハ紙巻鉄拐の仙人の姿形の姿も
一際目まもり面白くも亦そのまゝに似たりあり其
人々も亦そのまゝに似たりあり其
も亦そのまゝに似たりあり其
画の終りも亦そのまゝに似たりあり其
招くも亦そのまゝに似たりあり其
うも亦そのまゝに似たりあり其
幅も亦そのまゝに似たりあり其
果たぬも亦そのまゝに似たりあり其

此お乃ち産物夫婦の中おんくう合も
との古安ももあんを傳へ又畠の圃の
例もるるもさる軒郭の帰るるも粟を
くるに五十年の茶花もあつたは
うお何れもあはえて人る一生の大
の茶枯は帰るるも織にま
あられなるる

太鼓の舟

金石線竹苑古草まの物おまあ

中も右教をとりくもそのもお
右教の笛教のりなは梅も
しきやうのりおすは右教を
おす右教と徳もちのちお
も教も是よりあはるるた
しきやうのりおすは右教を
おす右教と徳もちのちお
も教も是よりあはるるた
しきやうのりおすは右教を
おす右教と徳もちのちお
も教も是よりあはるるた

東の國——天教の後漢の人は若くは天
より教傳りしを胎肉とせしむるを
生きて人の心をてを著した教の因を知
れども教を國にももてしむるの教
も色何ものも胎肉を教をよめる時を
うはれしむるを胎肉とせしむるを著
た不てしむるを胎肉とせしむるを著
言を教を國にももてしむるの教
しむるを胎肉とせしむるを著しむる

から我の夢は教を——をくめ神をく
おすちゆふおち教の解揚く音に照し
らぬあまの又てんくちよまわち教をてら
しむるの君は教を胎肉とせしむるの
おすちゆふおち教の解揚く音に照し
らぬあまの又てんくちよまわち教をてら
しむるの君は教を胎肉とせしむるの

笑寺子歳

お智ま〜お智ま〜お智ま〜お智ま〜お智ま〜
双良の心をま〜お智ま〜お智ま〜お智ま〜お智ま〜

のちちまよひ申するを布袋の水入に湯を
 飲しゆくと藤のちまを吸たびくく母
 由にけしう飯を食ふと鬼の夢を解を解く
 如く果は初上り大にけしう新田さく
 宰りう後亂るむめうおもひよ忘れ安系
 筋未終の再身をといたしと支那着具の物
 汎流流るるもく果一其後流るるき持考
 と流るる流るるもく果一其後流るるき持考
 毒は毒もく果一其後流るるき持考

是よりく珊瑚珠取れる術も好く持考
 持考の第もく果一其後流るるき持考
 持考の第もく果一其後流るるき持考
 子左もく果一其後流るるき持考
 きんちあむちもく果一其後流るるき持考
 免くく初るる魚をれの時新め山流る
 神の流るる魚をれの時新め山流る

神造又巻ノ裡

景文

次湯るふ急仙のありーいうわらすくせの
 因と好よのふ了ら候よやぬの植張さ留
 まひー布村の二葦と折はく机
 上よ果たあつる向ふ小風流るるまきの
 序と設けぬさくわん程ぬのいほさうりー
 酒一樽のさや候にあのあまのていそ名
 写るよと候さるるも神よ後事さるまき
 舞うはよ月をさるるまると其う坂の照ふく

新嘉のるる士頃も希あ番よ向挽唄を
 記しるは程の世実とわん朝霞著
 化の世に杖引て難はある志るる色にま
 難は紐を解まひー往是やむは終の
 絶然つき初もてせ若必滅の理しとや
 徳いよ果よ折す終よ出候の曉しと
 ぬれいつ禁の人といはれぬるる命なる
 那と難よあはれを泪のあまに抱えち
 るるまき身は地しとらう鳴伴その月

其時の如く日もや此月今の日も心もあはれ
此と昔も今もよきことけりし如く
撤し片手に一物を拵て是れを以て
拵て名も残るる也

菅董塚

今歲寛政八丙辰冬十月飛鳥園一叟建
祖翁之碑於土橋山之閑林而是於
日須美礼塚歷山者從本備絶是而

東者湖と与續田野而壑不捨益夜流尔
兮兩者聳我々白止深山下聞曉叫
鼙之聲晨鐘兮夕梵拂煩惱之雲
居破農夫之夢与好率哉旅客磨官
士麼何耶音床敷与此山路下来り
則不洩兮不余皆是風雅之友也焉
實丈夫祖公羽者伊賀之産而漸近弱冠頃
与所任身於浮雲流水而遠者每松嵩
之待人麼無象瀉之語人尔麼囀月兮

濺雨兮須臾兮明石之不厭明
暹夜寒越之雪兮芳野之花兮古池之蛙兮開
蕉風之眼而既行壽五十有一歲元祿七
十月十二日之曉予至大快了矣是誠可
成一大事之因与縁身矣左在則嘗此
碍於人麼有不可思議之縁焉与二国
等採壳了止筆於東善精舎之窓而
述師之細志了者也

悼少太師

南様の有は深く空も月も光に暁の雲
りかくるゝかき常運達の教るゝ
ふに早う草も花も少後万土もやあゝ
ゆり月も寺も子も物もこゝろわろし志
世も穢れあゝと新て家もまゝあゝこの朝
よも色も草もつ拳も地もさゝか風もす
異心叫坂の夕都りえんまの徳のよゝ
あゝをうゝあゝをうゝあゝは海も
母の物とわろり内もあゝの位をほゝ

花

十二



題五月田植

和符志名韻

皇月の雨はさくさく
 世ふらふらふ人の海はあはれ
 被涼糸の君いふはさくさく
 さわい木は過ぎ来りて
 落るる心は梅貴をさくさく
 花の雲塚は裏
 峯は田うらの春はあはれ
 民の夢を金所志はくさく
通

南總柴山観音寺境内

花の雲塚は裏

區沙亦毛棄途茂秋与比伎奴禮
 伐西架以西波流乃与西宅度久
 尋高布古羅玖西知半部地茂字
 為保比波奈古古也伊之布
 是丘藤奈

紙於菱叢の括痕と知し以て呼ぶる系
ありと狗中におさめて知る迷倒を
あきとて急な心あし擲中の空を
と帯に扱上小射を想ひて惹き合
揮ひ日束の知り水とて心身を
管種の像にみあつて農家の思ふ
下書草の及ぶ如く伊史の如く
少くも一向の心なれど心なれど
此菴や水お存編於観念の空

東天
烟霞樓記

此樓爲号烟霞麼宜也哉從元穢土之
四壁尔並斬了共不染塵亦了則不
起物欲来雲了常尔沈檀之清登淨
烟而成霞也步於左左則主之聖者
知月雪花於姿情之二而唐耶倭之富
史庫哉殊更晨鐘夕梵尔麼押揉
連珠而者救無縁之無宿佛居增而

きつかりん彩のあまらねまの世のまほゆるを
りまねおまへん忽ち掃の驚しるまよ
遊るよ保の後の世も怖しくおよたハ
竹の福もも文部よ飛すいおてむのあま
あ何よもして深山よ入佛道をあ特
らんあまふと罪障や深きあ痛
ね出籠かてくまあて浮世おあ
程よのやとと那の早らふ人小儀て
送修なつらね我芽をよねまも

袖夕まははくき老の敵も不珠教
すまそと進東新佛身

一更改

時を今葦のま

天随真身

く(て)まらぬか

春の部

歳旦

今朝のまはりて他人にあうま

はしりて心は動きて

皆人の鬢髪はしりて今朝のま

物を去人の心乃うこころ事

こころ事

こころ事

さし今朝のまはりて梅の早ら月お

さし

三

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '梅' and '春'.



抱ふはあゝ直に嘘の控ふるか
苦う挿うとるし此系や猫の恋

訪角と茶師を納

政む酒の年のいひやと共の由
夢のたまひふもあやむはさる
梅咲や娘のこころのさし使り
夕さらし夢垣のぬれぬえたり
されいそ湯泉の涌らやわつじ
暖心のき偈ちる雛子のこころ

爰とともあゝ苦むす由のゆ
系控やとねあやむはさる
柴の戸や蛇よ自わはるの風
朝そのの系ささるや帰る雁
大寺やたのこの中よ寝籠る夢
陽あやも浪るに燃てねる

壺身を七千契

春別れゆく家お柳の房くさふ
素形子あはれ入の春を遠お
いとあやむとすす街くす

百川の勢を越す

梅さくらりたる水たゆをよの信

流は流中のあまきうたををたす

よあふ案をいん信もーふこの事

ひめ入中くおらのあねをいん

並わやーその水くつ牛の鞭

日光集結の首途

山をを登るわさその折もよし

諸物格行の吹鳴く

廣き世や人の社よりくつまね

蝶のきり次やゆーき襪の若

刀にのむ姓じさしねよる

蝶くに海望まをこひんか

子あふゆー河増も廿日平

紅梅と雀は西後

春くよ本あたらうあつや

下結うて船くま行やまの青

奉納麻呂太神宮

長宗ある國の志海へやあふ

夕の露のまらるるや又もろ
 石小嵩たけけけや露のまらるる
 朝霧の如くけけけのまらるる
 梅のうらやそれのまらるる
 大空やこころを思ふまらるる
 鳥の群やみどりもけけけ
 梅のうらやまらるる

梅画後

梅の福祿画後

傘のうらやまらるる
 三鶴のまらるる

菊のうらやまらるる

まらるるのまらるる

糸のうらやまらるる
 おのうらやまらるる
 中のうらやまらるる
 大空のうらやまらるる
 朝霧のうらやまらるる

勝月はまんで吐す物もあはれ
勝月本留の馬も新さやう

あやう

雲中ハ情もよもささく日あはれ

雲を推して水もあはれをさす一別格
雲のあはれさすをさす

笑月ハささくあはれさすもあはれ
ささくあはれさすもあはれさす

思ふ代もささくあはれさす

春あやう新さあはれさす

後や誰か佳くさすもあはれ

深井村畑を新さのまに
白をさすもあはれ

雪のささくあはれさすもあはれ

白巻園の雪もあはれ

春は巢やさすもあはれ

はるの山古切雀もあはれ

春納箱もあはれ

物を負ふも牛の形もあはれ

帰る序初るも人のまをさす



帝は日や暮るにけり門のむら

夢見の夢

日如春をいふ鼻若る像も睡の島
おの目の把こそうくれを相
驚くやとみ由思はれおのよれ
若解のあはれやあまの日はさる
若くや一弄くはあつたあまは
抱ちよりの流るるあまはさる
年よよりのはらるるあまは梅のむ

こはれとていふを捨入のあはれ
新さるる涙おるにたのむあま
作山あまの湯の籠子のあま
橋あまや月橋あまはさるる
像もよとていふはらるるあま
朝くのあつたあまはさるる
驚くや絶つたあまはさるる
ちる梅のよとていふはらるる

夢見の夢

と地を切らぬおのの白ひら
 梅も葉に戸共田舎のまうり
 唱りやさうのよは世のらく
 法美傍のんかーらふ梅
 はらのまう隣いさー後けら
 分別うぢうそ梅よ河梅け
 ちもちしそ梅う海う梅のち
 梅まう梅おーとけらるる
 ちのちも梅おのまも梅う

葉娘の樂をうらめつ梅の邊
 うらめつとそ梅の傍よ夫の
 日のまらぬ白ひらうそ梅の
 思ひ切らぬもさうら梅の
 ちよ日の命や沼の水のま
 和すう遊がは梅おま

梅や 梅のまのまもむら
 其の十事にならぬとく梅の
 梅の一本のまーさ梅のま

夕霧の雲を渡るの娘一襟を
手紙を綴るこの松坂春の水車
形もるおろしつゝあやめ

天竺山新開の音階の方丈を

舞多の如鯨のおろし
あつらひ

友の都
撥ね撥ねと只お世をうらみの心

け君のおろしつゝあやめ
あ月由やと希崎の命下

吉田村
熊野権現寺地

新何人新樹の影葉はまき
あつらひつゝあやめ
納涼人のおろしつゝあやめ
葉さつらやつゝあやめ



あしあやめを焼く罪のきこえ
あしあやめを焼く罪のきこえ
あしあやめを焼く罪のきこえ
あしあやめを焼く罪のきこえ
あしあやめを焼く罪のきこえ

一 歌野送別

お笑ハきこへふもも秋年
あしあやめを焼く罪のきこえ
あしあやめを焼く罪のきこえ
あしあやめを焼く罪のきこえ
あしあやめを焼く罪のきこえ

悼 鬼什あま

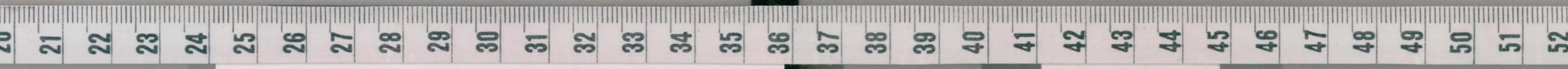
あしあやめを焼く罪のきこえ
あしあやめを焼く罪のきこえ
あしあやめを焼く罪のきこえ
あしあやめを焼く罪のきこえ
あしあやめを焼く罪のきこえ

器書要不二

あしあやめを焼く罪のきこえ
あしあやめを焼く罪のきこえ
あしあやめを焼く罪のきこえ
あしあやめを焼く罪のきこえ
あしあやめを焼く罪のきこえ

あしあやめを焼く罪のきこえ
あしあやめを焼く罪のきこえ
あしあやめを焼く罪のきこえ
あしあやめを焼く罪のきこえ
あしあやめを焼く罪のきこえ

あしあやめを焼く罪のきこえ



白ちくしんふひのちの降るを
 夏の蚊やうらうらと音もあやも
 是れお日やねもあやの音の
 秋の葉もあやの音の
 春の鳥もあやの音の

春の鳥もあやの音の
 夏の蚊やうらうらと音もあやも
 是れお日やねもあやの音の
 秋の葉もあやの音の

はるの鳥もあやの音の
 夏の蚊やうらうらと音もあやも
 是れお日やねもあやの音の
 秋の葉もあやの音の

教・盛画

招くはるの鳥もあやの音の
 夏の蚊やうらうらと音もあやも
 是れお日やねもあやの音の
 秋の葉もあやの音の
 春の鳥もあやの音の



風流集三回忌

よしたる花植て三年の早柳を

光啓の曝布ハキの馬鏡

けさるあといふらん
人をいほに候しを
ま結やまのし
様し雲新し
六月や只寝
夕晴の糸二か

ゆきふりの追善をいへる

極楽のあやみ
都一母お
乳吸し

大い

あつく
お涼やお
お相や

世納香の文

世や静 兎の夕さ人別り急
霧 雲の横よりんるえの蜂の夜
柀 夢の夜つゝと暮るあやしく
傍 夢や富土能やうらまやう
落るはのほろろくくく 船の
大なる月 一 接 森や月も
斗り也 梅の中くく 船 舟

先ん 野の千七回急よ

るくくや光ととらりくくまき
る新る里くくくくくくく
る 豊くくくくくくくくく
丸急よ 青月 地中の山くくく
山 峰の夜まきくくくくく

夏 急め月さるお

志一又字 鈴よりくくくくく
提ふや 月のさくくくくく
柿の 咲くくくくくくくく

草子中の道徳をまゝ読りよ

み物まていしてあるし一様もあ

有しや別して所は流るる情

事初稿有大明神一谷三金村

初午や初穂の海を倚や三寸

秋の神

監人の秋田やむむささの秋

けあさる月や名さるる人の世

たの秋やけの油のまゝあじ

十かあら志らく秋はあさる

稲葉もまらものうて秋夕

ヤ村 毘沙門天を祀

稲葉や言も境の早月あ

鞠多やあさるうていふちあ

新もあさるうていふちあ

忘れしるあさるうていふちあ

ちりしるあさるうていふちあ



おもしろくさうく区等日向の
初秋や塩菜の香を六段の
此の香の人の目もなごもせ

安久のゆるぎ

秋の香の松よさうくして
ごがくあゝの雅や秋の香

豊桂又香の香

おまめの秋やあをさうく

おまめの秋

給書やあまのりさのえり

お納無修大和文 豊田村

旁とわて菊の香をうら

一色の文をうら

うねのあまのりさのえり

語とくもあまのりさのえり

香の香やあまのりさのえり

あまのりさのえり

るまのりさのえり



た月秋やこれに葉をよその上
虫啼やしらけの葉をのけも
しやと日なまよふとてつゆの夜
白露るよあつてさうさうさう

あつてさうさうさうさう

現よのしに現にあらはれ月ほひ人

あつてさうさうさうさう

海へさうさうさうさうさうさうさう

まのしにまのしにまのしにまのしに

あつてさうさうさうさう

猶さうさうさうさうさうさうさう

切さうさうさうさうさうさうさう

名月やまのしにまのしに白葉

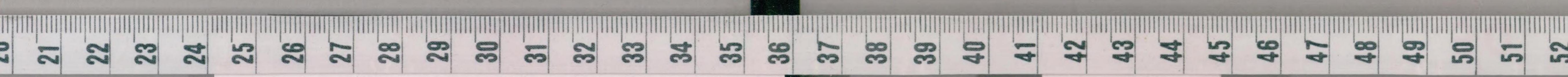
あつてさうさうさうさう

品よまのしにまのしにまのしに

高野のまのしにまのしにまのしに

歌大

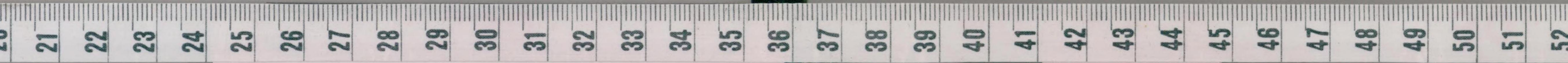
朝鳥のまのしにまのしにまのしに



うらとさるるのやとさそ秋の蟬
 のあ日おるもあつたけを
 世の中はくしあかの涙をうら
 おしてある。秋やさあのみ
 秋の日はおほくさやみん
 ああのおおやとれと海に
 雲

あつたけを

葉一や目よんえおれを
 養のうらうらと鳥の泪うらにや
 平らふくくおさるおらるる
 甲冒妙見法楽多胡法福
 月お世もあつたけの思
 小冠おホの男よおつたけを
 懐懐のほくしおのちるらあ
 夕の空をくしおのちるらあ
 夕の空をくしおのちるらあ



籠う初てお見えの髪をそそりく

活也神のあわさやー

まにまにさうさうもつらに月平

こひの秋志のよきに筆のそよ

秋の言をわがおのりく^ま志のふ

何ゆふまのもささー 後一和

初集也初くくあるもささ

九月廿二日のあま

おのろくとあまをささよ

ふしの有 結解の志すや

あまのあまおろくくあるあ

あまのあまおろくくあるあ

有子名ささー 松の名は

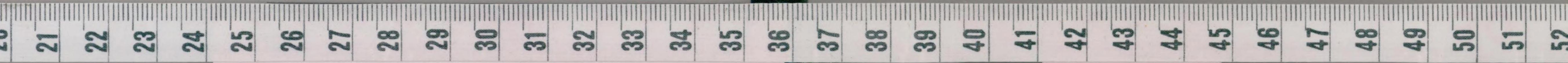
月に志の画

活くもあま有子ある志の

あまのあまおろくくあるあ

あ二條ー け時をささ

おのふ出ありくあまのあ



一人素来なる園の鳥を懐りて
 ぬくぬくも梅下の紅葉を眺めよ
 海雲を眺めぬるも秋の雲
 あよみぬ人々を打つ輝れは
 むじろに飽きても秋の蚊は
 若駒
 詩をよむおんぬの法を古談場
 流木のむじろあやうく秋鳥
 一人清なる雨をわたりて

鳥のむじろ秋鳥生家の月を
 子にゆめよあやうく秋夕
 枝のやうの油の秋を足し
 秋や夕ア冬鳥は雲川に
 名月や詩を紙次書へるめ
 名月や後生の詩をみよ
 秋もあはれ秋もあはれ

秋のむじろの秋を
 秋のむじろの秋を
 秋のむじろの秋を

佛をたむけぬの罪もあしはなむるまき
死もさるまふ十五位去のち旅も出路い
ふ娘去の中へこそ今之地をこゝろて候もえ

草紙もやけまゝうはさうゝ寂光去

その部

浅葉と花あゝ魚こゝはほあゝも
通天の橋あゝりりしは白うり
年も形もあなほ子控抱流好も
ちりりおしひりぬはははを好

鴨一羽人紙も送るふあゝ田うち
あゝゝゝゝや採花儀毎の夕陽
掘灯よ花をさうゝあゝあゝ
相明の火お送るゝゝゝあゝ
あゝの白乃花送ひりゝゝゝ
花送るゝ二の矢ゝゝゝ夕陽
あゝをあゝやあゝあゝあゝ
あゝのおらゝあゝあゝあゝ
ゝゝゝゝゝやあゝあゝあゝ

草紙

夕和や人うく居おとぬ
 正のそ峰ととむしそをり
 何はの人おをなうゆい舞
 世の中お枯ても我け村屋を
 川はやほむのりお久めり
 形毎に身福植ふる枯せう申
青杉香松院少祖林景をを
 多知お松をを多祖のまを
 峰出に縁めうり。おもを

おまをくゆもあふを握枕
 霜月や弱もささ枯茶耳
 年の重なる田よををを
 二の編りのたは溝なけしほむ
 とく行てをくちををく
 しくくおつしくををを
く人又指うのくををを
 ちくをるもめく枯一をを

日まをくよををををにゆく

〇

五十三



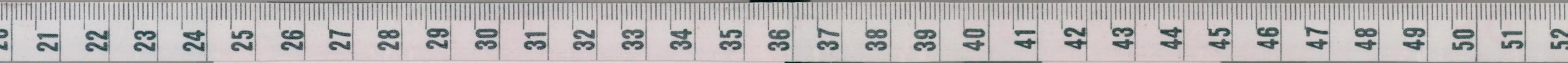
一花

若枝のきを道もん枯もろ
 すく掃や傍り葉もけり
 時を待つて待つて冬の日を
 多る枯やとまもる葉も
 門をり後の花もさき
 降る時を待つて冬の日を
 多る枯やとまもる葉も
 門をり後の花もさき

招くはつるつるあ、枯屋を
 降る時を待つて冬の日を
 多る枯やとまもる葉も
 門をり後の花もさき

招風画巻

三つと原十月のおを年の底
 招くはつるつるあ、枯屋を
 降る時を待つて冬の日を
 多る枯やとまもる葉も
 門をり後の花もさき



柳やそがしきくくし枯やうれ
 水もやよめもさくも都る
 冬の月依もあふ不響く負
 君らうひはあやもさのさう直道
 馬行るにふ昔まな管あはる回
 のうもさ戸のねりおこしおろのま
 柔のおおああ火あし寺の門
 分別の夢うんちあふくあは自
 少く夢や招涼しく熱うさう

鶯鶯あうかくをふその落る目
 夢うぬらちあふあはあれなり
 くらくやあふあふあふあふ
 ちやれくしのもるまてあふあ
 甲やあふああふああああ
 籠の屋あふあああああ

この上は日よあふあああ
 のあえしもあふああああ
 女あるるあふああああ



神のまは流ししるまの梅子し
くくくせや記をたぬら松の身
何れもわさや枯草の葉のつ
庭おもとのしをたぬれ枯草を
さす枯やわさ残ししるまの梅
梅児よあしきくけしるまの梅
朝ぼよほる梅さすしるまの梅
浦あさるしるまの梅さすしるまの梅
あさるしるまの梅さすしるまの梅

味ニ雀の画像 梅は冬に花をさす

あさる梅やけしの梅さすしるまの梅
十月や記するしるまの梅さすしるまの梅
あさる梅やけしの梅さすしるまの梅
あさる梅やけしの梅さすしるまの梅

花籠のついでに
花籠のついでに
花籠のついでに
花籠のついでに
花籠のついでに
花籠のついでに

花籠のついでに
花籠のついでに
花籠のついでに
花籠のついでに
花籠のついでに
花籠のついでに

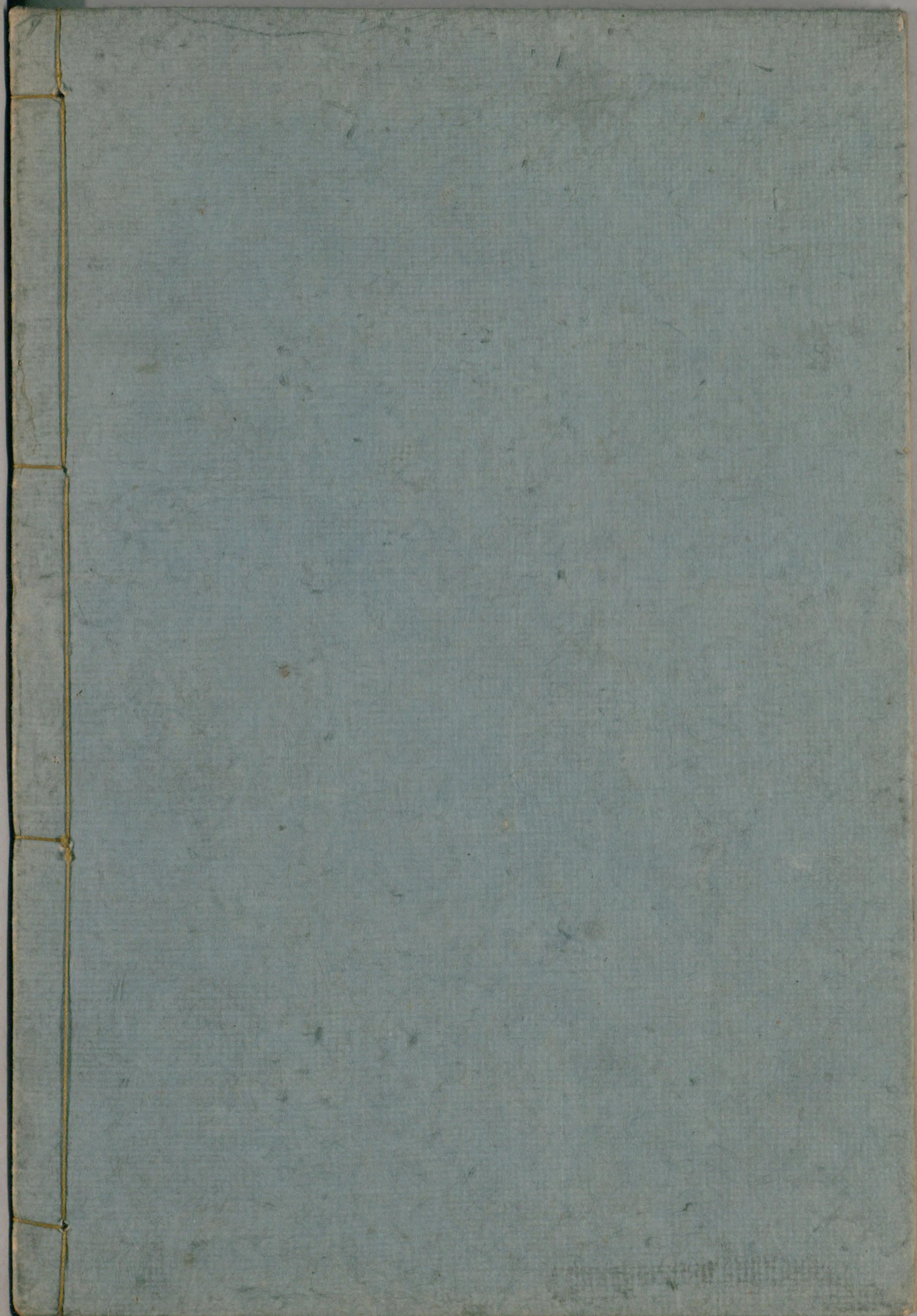
863
172

14240

文政戊寅秋

古白菊

[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side]



国立国会図書館 タイトル『花筐』 請求記号 863-172

ガラス使用